



第104回全国高等学校野球選手権大会優勝
仙台育英学園高校 各2年

尾形樹人

Ogata Mikito

高橋煌稀

Takahashi Koki

8月6〜22日に開催された夏の甲子園、仙台育英学園高等学校は悲願の初優勝を成し遂げ、100年以上かなわなかった優勝旗の白河の関越えを果たした。

尾形と高橋はともに迫町出身。小学校の時に野球を始めから、ずっと同じチームでバッテリーを組んできた。高校は憧れだった仙台育英に進み、甲子園を目標に掲げた。

捕手の尾形は、常に冷静な状況判断や打者の分析で、最適な配球を組み立てる。県予選から全ての試合に出場し、ベンチ入りしているさまざまなたいプの5人の投手をリードし勝利に導いた。一方の高橋は、最速145km/hの力のあるストリートと安定したコントロールに定評がある投手。甲子園のマウンドでもその剛腕を遺憾なく発揮した。

高橋は、初戦の鳥取商業(鳥取)で5回を投げ1安打無失点5奪三振、続く明秀日立(茨城)戦では、3回を投げ2安打無失点の好投を見せた。しかし、準決勝の聖光学院(福島)戦の前に「いつものピッチングではない」とブルペンで感じた尾形は高橋を一喝。試合中もピンチの場面では高橋に駆け寄り声を掛けた。仲間

の援護をもらった高橋も2回3安打1失点の力投で応えた。決勝の下関国際(山口)戦では、8回から「とにかく楽しむ」と心に決め、高橋はマウンドに立った。無失点で抑え、念願の優勝を勝ち取ることができた。「幼い頃からの夢がかなってうれしい。1試合ごとにチーム力や個人のパフォーマンスが良くなっていった。とにかく楽しかった」と2人は笑顔で振り返る。

2人は、「良き仲間であり、良きライバルだ」と口をそろえた。小学校から切磋琢磨し合い、お互いを認め合う強い信頼関係で結ばれた2人。尾形はリーダーシップがあり、チームを引っ張る頼れる選手」と高橋は話す。尾形は「高橋はここぞという時に抑えることができる力強い選手」とお互いをたたえる。

9月5日、市に優勝報告に訪れた仙台育英の選手たち。「本大会ではたくさんの方のおかげで勝つことができた。新チームでも次の大会での優勝を目指したい」と意気込みを見せる。

新体制で臨むこれからの向けスタートを切った。春の甲子園、2度目の日本一に向け、選手らは歩み始める。



千葉 遼

Chiba Ryo

全国中学校体育大会
第49回全日本中学校陸上競技選手権大会
男子四種競技優勝
南方中3年

全国中学校体育大会第49回全日本中学校陸上競技選手権大会は8月18〜21日、福島県福島市で開かれた。

千葉は、小学6年の時、コンバインドA(80mハードル・走高跳)で全国大会に出場した経験がある。中学に進んでからは陸上部に入部し、四種競技に力を注いだ。四種競技では今までやってきたハードルと走高跳のほかに、砲丸投と400m走が加わる。未経験の種目への戸惑いもあったが、持ち前の運動神経でどんな記録を伸ばしていった。

しかし、中学2年になり、記録が伸び悩む。良い成績を出すにはどうしたら良いか試行錯誤の日々が続いた。練習に明け暮れていた時、宮城県の強化指定選手に選考された。専属のコーチが付き、走りフォームやトレーニングなどの指導を受けた。週1〜2回の練習だったが、千葉の調子は良くなり、記録も徐々に伸びていった。

迎えた市の中総体では、見事優勝。続く県大会、「全国標準の記録を目指す」と目標を立てた千葉は、2828点を叩き出し、大会新記録で優勝。しかし、現状に満足することなく、東北大会までの限られ

た期間の中でベストを出せるようにと、課題の砲丸投とハードルに力を入れ、練習を重ねた。東北大会は雨天に見舞われ、コンディションは良くなかったが、2814点を記録し優勝を果たした。「悪天候だったが最善を尽くすことができた」と振り返る。その後も千葉の勢いは止まらず、全国大会では県大会、東北大会の記録を大きく上回る2920点を出し、優勝を成し遂げた。「彼は明るく、何事にもひたむきな性格で日々の練習にも全力で取り組んでいた。これまでの努力が報われて本当に良かった」と顧問の佐藤先生。

「大きな舞台で自己ベストを更新でき、さらに優勝することができてうれしい。この結果は、家族、先生、コーチなどからの大きな支えがあったからこそ」と感謝の思いを語り、「結果に満足せず、残された大会でベストを尽くせるように練習を続ける」と改めて気合いを入れ直した。

高校でも陸上競技を続けたいと強い意志を見せる千葉。「次の舞台に向け、練習を積み重ねていきたい」と話す。記録を更新し続けるため若きアスリートは今日も走り続ける。